

Community Welfare Total Care Promotion Project

# トータルケアNEWS

19 2007.4.27

発行 社会福祉法人 秋田県社会福祉協議会  
〒010-0922 秋田市旭北栄町 1-5  
TEL 018-864-2711 FAX 018-864-2701  
URL <http://www.akitakenshakyō.or.jp/>  
E-mail [chiiki@akitakenshakyō.or.jp](mailto:chiiki@akitakenshakyō.or.jp)

## CONTENTS

### 【寄稿】

「役職員一体となって実践づくりを!!」  
… 1~2

「トータルケア推進事業の充実を目指して」  
… 3~5

### 【対談録】

H18.市町村社協事務局長会議 対談  
… 6~13

## 【寄稿】

### 役職員一体となって実践体制づくりを!!

～トータルケア3年目を迎えるにあたって～

秋田県社会福祉協議会  
事務局長 高橋 豊

平成19年度になり、事務局長に就任いたしました。どうぞ倍旧の御支援・御協力をお願い申し上げます。

住民参加による地域の支えあいを目指した、この「地域福祉トータルケア推進事業」は、平成18年度で25市町村社会福祉協議会の全てで取り組まれております。私どもの職員も延べ110回の支援を展開しながら、現地に学び、ともに考え、実践に向けて取り組んだところです。

各市町村社会福祉協議会の支援や実態を、この事業の実績報告や自己評価診断をもとに総括する中で、いろいろな状況が見えてきました。

市町村社会福祉協議会の合併に伴い本所・支所が誕生したものの、それぞれの役割や機能の調整が難航し、地域福祉トータルケア推進事業の取り組みにも影響している状況があること。サポート運営委員会は設置したもののニーズ把握ができてなかったり、ニーズ調査は実施したものの分析がなされず機能不全に陥っているところもあります。分析結果を地域住民に返しきれない、課題解決の糸口を見出せない悩みも見受けられました。福祉（協力）員を増員・設置したものの具体的な役割や連携を今後の課題としているところもあります。

こうした状況は、吉田前常務理事兼事務局長が「トータルケアNEWS」3月号で奮起を促した「社会福祉協議会の存在意義の明確化」や「社会福祉協議会役職員の意識改革」のために必要な苦しみでありましょう。

しかし、CSW（地域協働生活支援員…あえて意識。）は、平成19年度に向けて、意気込みを語っております。住民参画を促す座談会の開催、自治会や老人クラブと連携したサロンづくり、個別実践事例の積み上げと啓蒙活動、空き店舗活用、移送通院サービスの企画、防災マップからのコミュニティづくりなど、etc…。

各市町村社会福祉協議会にあっては、意欲に燃えているCSWを孤立させない仕組みを整えてもらいたいと願っております。役職員が一体となって意見交換できる機会の設定や、実践への協力体制づくり、今、このことが事業を進めるにあたっての大きな鍵になっていると考えるからです。

# トータルケア推進事業の充実を目指して

～ 18年度の総括と19年度へ向けた課題～

秋田県社会福祉協議会

地域福祉課長 高橋 清好

平成17年度からはじめた地域福祉トータルケア推進事業(以下「トータルケア」)であるが、2年目にして県内25市町村の全てがこの事業に取り組んだ。合併して事務局体制が十分整っていない社協も見受けられ、全体的に見るとトータルケアが徐々に進んできた市町村とまだ役職員段階の事業浸透も進んでいない市町村との差が見られる。

今回は、運営委員会で出された成果や課題を踏まえ、本年度の取り組み方針を述べてみたい。

## 1. 全県的な取り組み状況

< 全体的取り組み社協(モデル地区) >

モデル地区として美郷町、藤里町、湯沢市の3市町村社協を指定、平成17年度から4つの取り組み課題である「総合相談・生活支援システムの構築」「福祉を支える人づくり」「介護予防のための健康生きがいづくり」「福祉による地域活性化に取り組んでいる。日本地域福祉研究所の指導もあり、2年間(実質1年半)の短期間で大きな前進が見られた。

### 美郷町社協

合併後の美郷町全体(第2階層)に関わる福祉課題について協議、検討する目的で設置した美郷町サポート運営委員会に町全体の福祉課題である「人材発掘」「相談ネットワーク」「余裕教室活用事業」の3つの作業部会を立ち上げ具体的な取り組みについて協議した。

雁の里ふれあい運営委員会(仙南地区)では、「男性参加収益事業」「空き店舗活用事業」について取り組み協議をし、具体的な事業に結びつけた。また、今年度、新たに六郷地区にも地区運営委員会を立ち上げ地域課題の解決に向け取り組みを展開した。

### 藤里町社協

行政から地域包括支援センターを受託したことにより、指定介護予防事業所の指定を受け、介護予防マネジメントと指定介護予防事業を一体的に行うことができ、総合相談機能の充実を図ることができた。また、福祉による地域活性化として商店街の協力を得て、商店街をまるごとサロン化し、利用者へ向けてのマップづくりを行った。

## 湯沢市社協

今年度、市街地(旧湯沢市内)と山間部(坊ヶ沢地区)の2つのモデル地区内のサポート委員会が地域課題の抽出とその課題解決に向けた取り組みをしてきている。市街地では、児童の安全確保という課題に向けて「子供の安全」作業部会を設置し、子供110番の家の検証、受入れマニュアルの作成、配布を実施したり、住民座談会等で生活課題の整理を行った。山間部では、拠点を中心にサロンや健康教室を実施した。また、昨年市内の大型店に設置した福祉活動及び相談拠点「きっさこ」も障害者団体などの当事者と市民との接点になっている。

全体的取組社協(モデル社協)の地域特性や課題を踏まえたそれぞれ特色のある実践に徐々に取り組まれてきていることは、モデル社協としての役職員のやる気が感じられ、全県への波及が期待できる。

### < 段階的取組社協 >

総合相談・生活支援システムの構築 福祉を支える人づくりを必須とする段階的取組社協もサポート運営委員会を設置し、専門職アンケートを実施するなどして地域ニーズを把握している社協も徐々に出てきている。地域の様々な生活福祉課題解決に向けた総合相談・生活支援システムの確立を目指して、地域課題の把握と住民参加促進を積極的に実施する社協が見られるようになったことは、トータルケアの一定の成果といえる。しかし、実施社協はまだまだ少ない状況にある。

## 2. 課題

一つは、段階的取組社協の取り組みがなかなか進まないところである。

理由としては、次のようなことが推測される。

コミュニティソーシャルワーカーの不足と実践力の不足

関係者に対するアプローチ不足

組織体制の未整備

もう一步踏み込むと…

社協内部の合意形成がなされていない

社協の財政悪化を理由にトータルには取り組めない状況にある。

職員への周知と理解の徹底が図られていない。

…という状況が推測される。

もう一つの課題として、指定後の財政支援についてどうするのかという点である。段階的取組社協の中には、全体的取組社協(モデル社協)と同等の内容で事業を進めようとしているところもあり、行政からの支援、共同募金や民間助成の活用促進を図る必要もある。

### 3. 今年度の取り組み方向

今年度は、次の項目を重点に進めていきたい。

#### < 全体的取り組み社協（モデル地区） >

3つのモデル地区とも年々充実した活動をしてきているところであるが平成20年度に本県を会場に「全国地域福祉実践セミナー」の開催が予定されており、全国発信できる実践の質を高めていく。また、モデル指定の最終年となるため、県内の各市町村の参考にするための「実践の手引き」を作成する。そのため、4つの重点を柱にモデル社協の実践整理、客観的な評価と効果を明確にしていく。

#### < 段階的取組社協 >

##### ・第1期段階的社協（平成17年度～19年度指定）

8市町村が最終年度を迎えている。「総合相談・生活支援システムの構築」「福祉をささえる人づくり」を必須に事業展開し、徐々にではあるが成果も見えてきている。しかし、取り組み格差も見られ、3年間の取り組みを分析し、平成19年度の事業計画、予算、体制も踏まえ3年間の事業到達度を再構築する。

##### ・第2期段階的社協（平成18年度～20年度指定）

14市町村を指定。実践がまだ見えてきていないため、19年度事業計画、予算を中心にトータルケアの取り組みを点検、具体的取り組みの方向づくりについて再検討をする。

なお、平成19年度のトータルケアの事業計画を策定していただくことになるが次の点に留意して、自己点検（自己評価）を会全体でしていただきたい。

#### 事業の妥当性、具体性について

事業の実現に向け、具体的かつ計画性のある事業計画になっていたか

事業を確実に実施できる体制となっていたか

#### 費用の妥当性

事業費用が妥当なのかどうか

#### 活動の発展性、継続性について

社協活動の中でトータルケアが明確で、今後の社協活動推進するうえで十分な効果が期待できるか

#### 地域ニーズにあった事業か、独創的か

地域ニーズに対応するための独自の視点や特色ある工夫が見られたか

平成18年度事業計画に対する到達度はどの程度か

トータルケアのポイントは、CSWの実践力とそれをバックアップする社協組織と住民の参画のあり方にある。個人、住民の本当の生活課題を把握し、整理し、方策を探り、解決に向けた取り組みを行う。このシステムを3年間指定の間に確立するのは、難しさもあるが社協の存在意義もここにあると考えられる。確立に向けた取り組みを期待するところである。

## 【対談録】

# 琴平町における住民主体の地域福祉実践

〔対談者〕

琴平町社会福祉協議会 業務課長 越智和子 氏

秋田県社会福祉協議会 常務理事(当時) 吉田慶嗣

本ニュース No17において、2月に開催された市町村社協事務局長会議で香川県琴平町社会福祉協議会の越智課長からご講演いただいた内容を紹介させていただいたが、会議当日は、講演の後段で講師である越智課長と本会の吉田常務理事(当時)が対談を行っており、そこでの話しは今後トータルケアを推進していくにあたって大変意義深い内容であったことから、その内容についてもここに追加で紹介させていただきたい。

以下は、講演に引き続いて行われた対談の内容である。

吉田 琴平町社協には何人の職員がいてこれだけ素晴らしい実践が出来るのですか？

越智 常勤職員が18名で、うち正規の職員が14名です。あと、非常勤についてはヘルパーさんが多く、17名おります。

吉田 厚生労働省の中村局長が訪問した話を耳にしましたが、局長がどのようなことを聞くのに4時間半もの時間を費やしたのですか。

越智 はじめに琴平の取り組みを説明し、それに質問をいただく形で進みましたが、「地域生活支援ってどんなことをやってるの？なんでこうなったの？」などと、在宅福祉サービスで地域での自立生活を支えていくというようなところを多く聞かれました。そのうえで局長からは様々な事業によって対象者が重層的に支えられているとおっしゃっていただきましたが、確かにうちでは「このサービスを使っているからこれを使っちゃダメ。」ということではなく、介護保険を受けていても食事サービスを提供し、本来なら介護保険のデイサービスしか使えないところを社協の事業も利用していただくなど、利用者がいろんなところで重なっています。局長からはこうしたことについて「重層的



吉田氏(上段)と越智氏(下段)

にサービスをやっているんだな」と言っていました。

その後、最後の30分程度は事務所を見せて欲しいということになり、その際、ヘルパーの部屋に服薬管理の為の薬を貼ってあるボードがあり、それをヘルパー達がはがして訪問していく様子が分かり、ヘルパー同士が連絡しているものが貼ってある様子をずっと見られ、「ここはまるで、ナースステーションだね。ここに緊急コールがかかってきて、ここから飛び出すんだな。」などというようなことを言われていました。こうして4時間半が経過しました。

吉田 高松空港まで送る車内で最後の質問があったそうですが…。

越智 高松空港に近づき、やっと終わるなとホッとしかかった時に、「越智さん、社協って何？一言で言ってよ。」と言われました。私は「えーっ!？」と思ったのですが、口からでたのは“ソーシャルワーク”という答えでした。「社協はソーシャルワークをやる場所じゃないんですか。」と…。その後局長は何もおっしゃいませんでした。ただ、その時私の横には全社協の地域福祉部長が乗っており、後からその時のことを聞くと、私が何を答えるかとかなりドキドキしたそうです。しかし、「ソーシャルワークという言葉を使ってくれたので僕はホッとした。」と  
言ってくださったので、  
それで良かったのかなあ  
と思っておりますが、その時の車内は誰も何も言わなくなったので、「私は何を言ったんだろう」と  
思って本当につらかったです。



対談の様子

吉田 越智さんのソーシャルワークというのは、やはり“大橋流”、つまり大橋先生との出会いだったのでしょうか。

越智 そうですね。大橋先生と出会ったのは、かつて東日本と西日本に分かれて行う福祉活動指導員や専門員の養成というのがあり、私はその時に大橋先生のお話を伺い、「ああ、これだ!」と思ったのです。昭和58年に社協に入って、「社協っていったって何をやるんだろう、行政のお手伝いをするところ？」それは違うし、ヘルパーについて地域をずっと歩き、その手伝いなどをしていてもどうも違う。「何をすればいいんだろう？」という中で、大橋先生の地域福祉というものに出会い、それからずっと現在に至っております。

吉田 確かに越智課長さんはもう大橋先生に出会った。しかし、実際に活動をしているのは職員の方で、その辺をどうやって職員の活動につなげているのか？こんなにやったら職員から文句がでないのでしょうか？

越智 確かに職員は忙しいと思うし、申し訳ないなと思う時はたくさんあるのですが、職員自身が「でも、やらんといかんでしょ！」という考え方なのです。

それは、配食などで若い職員も直接高齢者に接触しており、中には認知症の方、引きこもっている高齢者の方、老人性のうつの方もいて、そのような方と毎日接触しながら、自分に何が出来るのか、どのようにこの人を支えるのか、様々なことを彼らなりに考えている。そうした中で、琴平が地域としてどのような取り組みをすべきかということも理解していると思っています。

それから、職員が動くことはニーズキャッチを行うことになります。地域の人にとっては、社協職員がいつも地域にいて、呼び止めるとちゃんと答えてくれる…。そうしたことが安心につながっているところがあるし、その辺も職員が私以上に手応えを感じているからこそ、やらなければならないという思いがあるのだと思っています。職員はまさに地域の方々に育てられております。

「こんぴら地域福祉セミナー」も今年で10年目になりましたが、その最初からずっと大橋先生に来ていただいて指導をいただいています。住民が徐々に地域福祉というものに気が付くとともに意識も高まり、アンケートを行っても大変多くのことを書いていただくようになりました。それを一つひとつ考えて答えていき、地域の人に問題を投げかけられてはとにかく現場に行き、現場で考え、そこで答えを出せなかったら事務所に帰ってまず職員で考える。そのようなキャッチボールを繰り返すことで、仕事をやらされているというのではなく、自分たちでやっているということになるのだと思います。

吉田 先週の土曜日に社会福祉大会があり、テーマが子育て支援となっていたようですが、やはり子どもをめぐる虐待というものはあったのでしょうか？

越智 ありました。まだ親になりきれてない方が親になっているという事例で、ある日子どもが「助けてー」と学校に逃げ込んで来て、先生が驚いて話を聞いても、子どもはただ泣くだけで何も言わない。すると、後からその母親が「うちの子帰してー」と、すごい剣幕で学校に怒鳴り込んで来て、「親がしつけをするのがどこが悪い」と言うのですが、先生からすると、これはもう虐待ではないかという状況のようでした、朝食は食べさせない、服も洗濯されていない、学用品も揃えられていない。それでも先生たちがいろんなことをしてくれるのですが、どうにもならなかったとのことでした。



ある日、「越智さん、こんな家があるんだけど・・・」とその学校の校長先生が社協に来まして、「その家は子どもを養育できていない。どうにかならんのか。」と言われたものの、社協としては「これが高齢者だったらすぐに行ってたのになぁ。どうも子どもの問題には手が出にくいなぁ。」ということになりましたが、ただ、校長先生が直々に事務局に足を運んで「越智さん、なんとかならない？家のことになると学校はそれ以上入り込めない。地域でなんとかならないかなぁ。どうしよう・・・。」と言われると悩んでしまうところでした。

そうした中、その家にもう一人小さな子がいて保育所に行っているということが分かり、早速その保育士さんに話を聞いてみたところ、お母さんが夜の商売で朝、家にいないことがあり、そういう時にお父さんは子どもを保育所に連れて来ない時があるため困っているということが分かりました。

そこで、まずその子を保育所に連れて行くことからはじめようということになり、朝、社協の事務所でご飯を炊いて小さなおにぎりを2つくらい作り、それを持ってヘルパーがその子どもを保育所に送っていくことにしました。着替えをさせて、自転車の後ろに子どもを乗せて、おにぎりを食べさせながら、保育所に連れて行ってもらう。そんなことを続けながらその家に入っていく、学校の先生は学校としての立場でその家に関わり、私はソーシャルワーカーの立場で関わりました。

この事例で学ばせていただいたことがあります。それはこうしたケースは教育が見る見方と福祉が見る見方は違うということで、教育というのは子どもを中心に考え、子どもを成長させていくことを一番に考えます。そのため、親に対しては「こうしてください。」「こうでなきゃダメです。」ということになるのですが、確かにそれはその通りで、親だからするべきことなのですが、今回のケースではどうみてもその両親は親になっておらず、まだ自分自身が甘えたいという気持ちがあるようで、反発しか出てこないという状況でした。

私はこの人達にどう関わったらいいのだろうと思った時に、父親ではなく、母親なら分かるだろうと思ったことから、早速その母親に接触し、「大変だよね、子育ては」「あなたも大変だね。夜仕事をして一家を支えていけないといけないし、いろんなこともあるでしょう。」「子どもたちを連れて大変だよね。」「えらいよね。」「しんどいよね。」というようなことを話しました。すると、少しずつ彼女が私に気持ちを打ち明けてくれるようになり、次第にいろんな要求もしてくるのですが、その要求の内容が少し度を越すようなこともあり、事務局の中では「越智さんそれは利用されてるんやわ。騙されてるんだ。」と言われもし、私自身も2度3度、これは利用されているな、騙されてるなと思ったことがあったものの、「騙されよう。騙されてもいいわ。

私がそのことを分かってたらそれでいいじゃないか。」と、とにかく彼女の言葉を受け止めていくことにしました。

そうしたことを続けているなか、その子が小学校を卒業する時、彼女が目には涙をいっぱいためて周りをはばからない泣き方をし、「越智さんありがとう、死ななかって良かった。」と言ったのです。驚きながら聞いてみると、「私は本当につらかったんです。子育てをしている時に何度死のうと思ったか分からない。車に子どもを乗せて、海に飛び込んだらもうこれで全部片付くなって思って海へ行った。子どもを乗せて行ったんや。これで飛び込んだら全部もう終わるのと思った。でも死ななくて良かった。」と彼女は言いました。これを聞いて、「やはりつらい思いがあったんやな。6年間受け止めてきてよかったかな。」と思うことができました。

ただ、福祉というのは、「いいよいいよ、そのままで・・・」、「ありのままでもいいよ」と言ってしまうがちで、それはそれでいいと思うのですが、学校の先生はそうではなく、「ここで頑張れって後押しするのが教育。越智さんここで後押ししなきゃダメ」と、校長先生から私は教えられました。教育と福祉がそれぞれ持ち味を出していくことで、あの子たちを支えることが出来たと思っており、このケースを通して私なりに1つ学ばせていただきました。その校長先生は今年定年を迎えられるのですが、「越智さんとは戦友みたいなものやな。」と書いていただきました。

吉田 越智さんは、本当に心のこもった実践をされていますね。

なお、財政的なことをお伺いしますが、通常町の社協というのは自立した運営をしていくのは大変厳しい状況があります。そうしたなかで、香川県庁の事業をそのまま琴平町社協へいただいたとの話を以前伺いましたが、その辺の経緯を教えていただけませんか？

越智 ある日、県から社協に電話がかかってきて、「やってくれませんか？」と言うから「やります」と言っただけのことなのですが、それは子育て関係の事業で、子育て支援ボランティアの養成や、子育て支援ネットワーク会議づくりなどを行うもので、5、6年もの間補助金をいただきました。さらに、県の教育委員会からも文部科学省の地域教育推進事業というものをいただき、私たちは福祉教育だと思ってやっているのですが、そこでは“地域教育”という、地域の人たちみんなの生涯学習を福祉を切り口として進め、地域に人材を育てて行くというもので、それも県の教育委員会のほうから話をいただいたものです。

吉田 教育委員会からお金が出る事業というのは通常では考えられませんが、ほかに観光関係のほうはどうでしょうか。

越智 “ちょっとこ場”のほうに観光客の方が来ると、当番のボランティアも「お客さんが来たからおもてなしをしなければ…」ということで、話などをしてふれあうようにしています。もしかしたら、そうした場面を県の関係の方が見ていたのか、住民の立場でそのようなことをやっているのは珍しいとのことで、それも県のにぎわい創出課というところが“ちょっとこ場”やそのボランティアが存続していけるようにとバックアップしてくれるようになりました。



対談の様子

吉田 琴平町社協には越智さんがいるから安心して事業を下ろされるのかという感じがします。

越智 そんなことはありません。一人ではこのようなことは出来ません。ただ、「こんなことがあるよ」と言われたら、どの人に持っていくかは見極めます。この人に持っていったら動くとかそうでないとか、これもやはりいろんな人とのつながりの中で進めます。大きな網をかけるのではなく一本釣りというやり方ですが、行政の職員にしても社協のことを理解して欲しいと言ってもなかなか難しく、行政というよりは「あの人」というように狙いをつけてアプローチしていくと、そこから事業が来るようになることもあります。

吉田 医師と話しをするとかなり大変ですが、そこはどのようにして乗り越えたのですか。

越智 一番はじめに利用者の方を連れて診察室に行った時、当時の院長に「福祉、福祉って偉そうに言うな。あんたたちに何が出来るんだ。」とひどく言われました。確かに当時の社協では、お弁当もやってない、ヘルパーも今みたいに24時間365日じゃなく、言われたらそれはそうだなと思いました。

その先生は困ったらすぐ入院させるというような考えの方でしたから、「入院したら患者は安心するだろう。家に置いとったってご飯も食べささん。そんなんで福祉と言えるか。偉そうに言うな！」と、他の患者さんのいる前で、叱られたことがあります。自分自身も診察を受けるのは嫌いですし、さらにそんなこともありましたから病院は大嫌いでした。しかし、それでも足を運ばなければ高齢者を支えていくことは出来ませんし、一人ひとりを支えていくにはやはり福祉はつながらなければならないという思いから、最初は大変でしたが、アポを取って、待合室で2～3時間待たされても、それで

もお目にかかって「先生こうです」ということをどんどん情報を提供し、自分たちが何をしたいのかを伝えました。

現在私たちに最も力を貸してくれている先生にしても初めて社協の事務所に来た時は本当に震えましたし、口の中が乾いて、何を言えばいいのだろうかというような状態で、「あんたは何を考えてるんだ？」とも言われましたが、いまだに何を言ったか分かりません。ただその時「よし分かった、じゃあ今から様子を見るよ。やってみようか。」と言ってくださったことで、今に至ります。

乗り越えなければならぬものは沢山あって、福祉だけで問題は解決しない。地域というのは福祉だけではつなげれないということを、そうした経験の中で学ばせていただきました。

吉田 会場のどなたかご質問はありませんか・・・？

うちの安田が質問があるようです。

安田 今日のテーマでもある“住民主体”について、現状としては地域住民が自分達でやっていこうという意識をつくるまでが非常に難しいわけですが、琴平で実践されている住民主体の取り組みにおいて、そこに至るまでの住民の意識づくりはどのように進めたのか、その辺の経緯やポイントなどがあればお聞かせ願いたいと思います。

越智 今事務局が意識しているのは広報活動です。毎月1回事務局通信を発行し、とにかく今社協が何を考え、どうしたいのかということを知っています。テレビや雑誌、インターネットなど、様々な情報が沢山あるため、東京では今何が起きているのか、海外で何が起きているかというのはすぐ分かるのですが、案外、地域の人たちが何をやっているか、隣の町内や隣の地域では何をしているかということは知らないのです。せっかくの良い実践をしても分からない。だから、そうした身近なところの情報や動きをつなぐということ意識しています。

さらに、社協としての情報の伝え方を考える。例えば、介護保険制度が始まる際、行政は行政として新しい制度が始まるということで町内を説明にまわったのですが、同じように社協もまわりました。やはり行政と社協とでは立場が違いますし説明のしかたが違います。私たちは制度を利用する立場で、保険料を払う立場でこの制度はどうだということを説明します。行政は介護保険の制度を説明します。私たちは「これはどうしたら使えるか」「自分たちにどう影響が出るのか」「使いすぎたら保険料が上がる」ということも説明したし、「必要がない人は使わなくてもいいよ」ということも伝えました。このように、情報の出し方が違うのです。

また、情報をつなぐということ。それは、誰かから問題がありそうなケー

スの報告を受けると、必ず職員が動いて対応する。そしてその結果がどうなったかというところまでをその方にお知らせするというように、情報を一方通行にしないということに心がけました。

それと何より、“こんぴら地域福祉セミナー”で10年間、地域の人も福祉の勉強をしてきたということが一番強かったとっております。これが地域の方の意識を大きく変えたのだと思っております。

吉田 1つの町がそれぞれに向けて、全てに向けて、地域福祉を発信する。今我々秋田県も大変な福祉課題を抱えており、昨年からトータルケアという大きなプロジェクトを25市町村社協と県社協が一体となって進めています。どうかこの事業がうまくいくように、是非、アドバイスと励ましの言葉をいただければと思います。

越智 そのようなおこがましいことはとても出来ません！それこそ私は社協に入った時、秋田県の“一人の不幸も見逃さない”というのはすごいと思いましたが、一人ひとりを見つめていくということが大変だということも実践しながら分かりました。

職員によく言っているのは、「一人の人を支えるというのは簡単なことじゃないし、一人で出来ることではない。チームワークだね・・・」ということ。まず事務局のチームワーク。そしてヘルパーさんや食事サービスの栄養士さんなど、とにかく全職員が1つのチームになって動くことが大事で、事務局だけでやっていたってダメで、地域の人ともきちんと組んでやれるということが大事です。「私たちはいいことをやっているんだと思いが上がるんじゃないよ。私達が支えてあげている？とんでもないよ。支えてくれてありがとうと言ってもらえる関係づくりをしよう。」ということが、実践を進めながら一人ひとりの職員と地域の住民が関わる中で確認できていると思っております。

地域があって社協がある。社協は「いない」と言われたらなくなります。だから「地域の人に、社協がなくなったら困ると言ってもらえる社協になろう。」「行政からの補助金は本当に少ないけど、無理は言えないことも分かっているから、なんとか自分たちでお金を稼ぐ。自分たちの仕事を何とか考えて、地域の人に分かってもらおう。」「社協があって良かったと言ってもらえるようにしよう。」そうした確認は何度かさせていただいたところです。

吉田 ありがとうございます。まだまだ、もっとお話を伺いたいのですが、時間になりました。ここでお開きにしたいと思います。

越智さん本当にどうもありがとうございました。